

## 日清戦争義戦論とその変容

吉 馴 明 子

### 序

日清戦争は、近代日本の曲がり角だったとよく言われる。西欧列強の圧力で開国した日本は20余年を費やして、列強に対峙しうる軍事力の増強と、憲法や諸法典の制定、帝国議会開設と国内体制を整えた。しかしシベリア鉄道の建設に象徴されるロシアの南下、朝鮮半島における清国勢力の根強い影響など国外の状況には予断を許さぬものがあった。日本と清との朝鮮をめぐる対立は、幕末明治維新に既に顕在化していた日本と清との主導権争いであるが、この時期には朝鮮を中国中心の華夷秩序から引き離して、日本もその一員となった欧米諸国の形成する国際秩序のもとへ取り込もうという争いでもあった。

本稿は、主として植村正久発行の『福音新報』によって、キリスト者の日清戦争観を検討することを目的とする。植村たちは欧米から受けたキリスト教文明によって、新しい時代の日本のあり方を人々に伝えようとしていた。彼らは福沢諭吉や徳富蘇峰といった加藤陽子の政治史<sup>(1)</sup>に登場する啓蒙的思想家から影響を受け、大濱徹也が描く「庶民」<sup>(2)</sup>は、言説を届ける対象ではあっても、そこから影響をうけ、そこからものを見る地点ではなかった。植村らキリスト者の言論活動は、近代日本の政治的リーダーと庶民の中間に位置していたといえよう。これを前提に、

植村を中心に、内村を含む他のキリスト者たちが日清戦争期に、日本、朝鮮、中国の状況をどう捉え、それを「戦争」によってどう変えようと考えたか、その戦争論と西洋文明、キリスト教との関わりをどう考えていたかを検討する。この過程で福澤諭吉や徳富蘇峰らの影響について検討し、「文明」「進歩」と国家についての植村、内村らキリスト者の考え方の特徴と変容を明らかにしたい。

## I. 開戦期の日清戦争論

日本軍が戦闘を開始したのは1894年7月25日<sup>(3)</sup>、講和条約が発効して日清両国の関係が回復したのは95年5月8日、国際法上の日清戦争の期間はこの約9ヵ月間とされる。ただし、この9ヶ月間断なく戦闘が続いていたわけではない。本論では、開戦から平壤攻略・黄海海戦までを第1期、その後旅順攻略戦前までを第2期とし、旅順攻略から講和までを日清戦争についての総括期と区分し、彼等の時論の変化を紹介検討する。

### 1. 内村鑑三における「義戦」の構造

最初に内村鑑三の「日清戦争の義」について考えよう。英語原文‘Justification for the Corean war’は1894年8月11日付 The Japan Weekly Mailに発表され、『国民之友』には、8月23日に英文が<sup>3</sup>、9月3日に日本語訳文が掲載された。さらに11月に出版された *Japan and the Japanese*にも appendixとしてつけられた<sup>(4)</sup>。日本は憐れむべき東洋の弱小国でなく、志の高い指導者たちに導かれる世界に誇るべき国だと伝えることを目指した書物<sup>(5)</sup>に、黄海での戦勝ほどうってつけの事件はなかったに相異なる。

内村は「日清戦争の義」の冒頭部分で「吾人は信ず日清戦争は吾人に

取りては実に義戦なりと、其義たる法律的にのみ義たるに非らず、倫理的に亦た然り<sup>(6)</sup>」と述べ、その所以を縷々説明していく。「過ぐる二十余年間支那の我に対するや其妄状無礼なる事殆んど吾人の忍ぶ可からざるあり、大西郷已に此に見る所あり<sup>(7)</sup>」と、西郷隆盛が開国交渉の使者に立とうとした征韓論争時から説き起こす。これは日清戦争が「西郷が始めた戦争だった」からと、佐谷眞木人は当時の風潮を紹介し、アジアの支配者たるべき日本人の代表として西郷を呼び出したのだという<sup>(8)</sup>。そういう面も否めないが、筆者は内村が日清戦争の歴史的由来を語る中で漏らす「義憤」に、むしろ興味を引かれる。たとえば、西郷が開国交渉に赴こうとしたのは朝鮮の日本に対する対応が「妄状無礼」だったからであり、壬午事変後、清が日本の平和政略を妨害して「対面的に我に凌辱を加へ<sup>(9)</sup>」、朝鮮に開国を迫って世界への門を開こうとしたのに、清は日本を京城朝廷の邪魔者扱いをして「社交的無礼<sup>(10)</sup>」を働いたという。内村は清の「無礼」に対して憤っている。ちょうど、西欧人が朝貢貿易について「平等」を求めて怒ったように<sup>(11)</sup> 怒り、また西欧との交際では日本は先輩なのに「無礼」な、と伝統的な儀礼的価値から清を批判し、抗議しているように見える。

こうして終に日清間の戦争が始まる。内村が問題にする開戦までの「満二ヶ月」<sup>(12)</sup>とは、甲午農民戦争に関わる清国の派兵と日本の派兵が決定された5月31日から数え始められ、その後日本が「朝鮮の独立と保安とを維持」し「半島政治の改良に従事せん」と「終始一徹」協力を呼びかけ、対する清国がこれを「横柄にも斥け」、開戦に踏み切らざるを得なくなった7月末までである。戦争開始の原因は清にあるという訴えが含まれる<sup>(13)</sup>。

日本が朝鮮の独立と保安の維持を目的とするというには、清国とその背後にあるロシアの影響を排除する意味があり、これは例えば『国民之友』の蘇峰の次の記事に明らかである。

「日本政府已に朝鮮独立を担保する以上は、責任上、内乱を克定し、外侵に抗拒するの力を朝鮮国内に有せざる可らず…宜く何時にても我兵士を派遣し且駐在せしむるの自由権力を有せざる可らざるなり。」<sup>(14)</sup> (傍点筆者)

蘇峰においては、朝鮮の「独立を幫助」に「外侵に抗拒するの力」が含まれ、従って、朝鮮を自己の属邦となそうとする清国に対して、「一大決戦せざる可らず」と日清間の争いを明確に意識している<sup>(15)</sup>。しかし内村は、あくまで朝鮮の開国と独立が目的であり、それ故‘Corean War’なのだが、日清間の戦いはそれを妨げる清の「積悪に対する」抗議であった。

こうして内村は日本と清との争いを「新文明を代表する小国」と「旧文明を代表する大国」との間の衝突とする。小国を大国と戦わせるのは、「肉に対して靈を試み、量に対して質を練らんが為」の「摂理」という。「朝鮮戦争」において「進歩主義に則るべきや、」あるいは「一九世紀の今日満州的支那政府が代表する退歩の精神」の支配下に置かれるべきかが決まる。小国日本の勝利は進歩主義の勝利、つまり「自由政治自由宗教自由教育自由商業」を意味する。よって、日本は「地球表面に正義を建つる」戦い「義戦」を戦うと内村は主張する<sup>(16)</sup>。

徳富蘇峰は「一番私と内村さんと心があったのは明治二十七、八年の日清戦争の頃だった」と回想するが、内村は既にこの年の6月頃から『国民之友』への寄稿を始め、日清戦争についても、7月27日付『国民新聞』に「世界歴史に徴して日支の関係を論ず」を發表し、「日清戦争をギリシャとペルシャの戦争に例え」ていた<sup>(17)</sup>。「日清戦争の義」は「一世一代の風雲を動かしたものだ<sup>(18)</sup>」と蘇峰はいう。7月29日、今度は福沢諭吉が、「日清の戦争は文野の戦争なり」を『時事新報』に發表し、「新文明」対「旧文明」「進歩」対「退歩」という見方が広く人口に膾炙するところとなる。

「彼等（清国人）は頑迷不靈にして普通の道理を解せず、文明開化の進歩を見て之を悦ばざるのみか、反対に其進歩を妨げんとして無法にも我に反対の意を表したるが故に、止むを得ずして事の茲に及びたるのみ……世界の文明進歩の為に其妨害物を排除せんとするに多少の殺風景を演ずるは到底免れざるの数なれば…其運命の拙なきを自ら諦むるの外なかる可し」<sup>(19)</sup>

加藤陽子はこの福澤の主張が、日清戦争を「当初の利益線論から、朝鮮の内政改革を推進する国、拒絶する国という論理へ、さらに開化と保守の戦いといった論理の変遷の最後を締めくくった<sup>(20)</sup>」としている。すなわち、「文明進歩の為め」という「文明論的意義」が「正義の戦争」の位置づけの仕上げをしたということである。

福澤は我が国の攘夷排外の気風を儒教思想に起因するものとみなし、朝鮮の近代化運動への日本からの支援に清国が反発して日清関係が悪化すると、反「文明開化」の「牙城」清に対する敵対意識を膨らませる事になったといわれる<sup>(21)</sup>。内村は「日清戦争の義」において「孔子を世界に供せし支那は今や聖人の道を知らず。文明国が此不実不信の国民に対するの道は唯一途あるのみ、鉄血の道なり、鉄血を以て正義を求むるの途なり。」激しいことばを清に投げつけている。「保守的東洋」の改革のためには清を討たねばならぬとする使命感は、福澤に勝るとも劣らぬものがある。このように激しい義戦論を内村が持つ背景について、鈴木俊郎は内村の「日本国の天職」（1892）から日清戦争に関わる論説（1894）までの諸編は、「『世界歴史の趨勢』と『日本の天職』という二つの課題を中心に展開されて」おり、「世界史観が世界史観にとどまる限り、それは思想の範囲にぞくするが、それが日本国の役割、その天職に及ぶ時に、あるいは現実の政治とのかかわりあいが生じてくるであろう<sup>(22)</sup>」と1973年に発表したエッセイで示唆している。

内村は「日本国の天職」において、まず「東西の間に起立」する日本人として、「他国の文明を吸収并に消化し」「西洋より文明を輸入し之を消化し之を変換し之を改良」する役割を求めたが、つぎに「東西兩岸の中裁人」として働かねばならないとした。「中裁人」の役割は二重である。一方では、「機械的の欧米に対して理想的の亜細亜を紹介」し、欧米の文明に「反動力を与へ之に新活気を与」える。他方で「保守的の東洋」に対して「進取的の西洋を以て」開かねばならない<sup>(23)</sup>。「汝旭日帝国よ 汝の光線を東西に放ち東の方欧米に反射し 西の方亜細亜を照し以て汝の天職を満たせ。」しかもこの仲裁の業がいつも「平和」的に進められるとは限らないならば、「若し止を得ざるに出れば、吾等は微弱なる亜細亜を導き傲慢なる欧米を挫くの決心なかる可らず<sup>(24)</sup>。」アジアと欧米の関係が逆になることもあり得るだろう。実際、「我は開かんとするに、彼は閉ざさんとし、」清自身が「退陰国」であるように、朝鮮にも「満州的制度を課し」「属邦として依頼国」たらしめ、その「不能を計った」清はまさに、「世界の進歩に逆抗」する国と見なされざるを得ず、「日本の天職」とは厳しく対立する他ない<sup>(25)</sup>。内村が清国に対して「鉄血を以て正義を求むるの途<sup>(26)</sup>」を提唱した所以である。こうして内村の義戦論は、徳富蘇峰の「支那論」や「朝鮮に対する政策」に「文明」「正義」を補う形で、『国民之友』の対清戦争推進の一翼を担うこととなった。

以上で内村鑑三の「日清戦争の義」を中心に「義戦」に託された歴史的な文明史的意義について考えた。植村正久も、8月17日の『福音新報』で日清戦争について、「心霊上、倫理的に、日本の地位は公明正大」としている<sup>(27)</sup>。以下、植村正久を中心に日本のキリスト者たちがどのように日清戦争と関わろうとしたかを明らかにしよう。

## 2. 『福音新報』にみる日清戦争へのキリスト者の対応

日清戦争開戦が決まると、各地で「義勇兵」を組織する動きや、軍事費を補ったり兵士支援のための義援金運動が盛んになった<sup>(28)</sup>。キリスト教界でも、8月3日に「日清事件基督教徒有志会」(傍点筆者)が開かれ、負傷者の看護と戦死者遺族の扶助のためなどの協議をし、本多庸一を委員長に選んだ<sup>(29)</sup>。この会は、8月23日発会の「清韓事件日本基督教徒同志会」(傍点筆者)に発展したと考えられる。8月31日付『福音新報』は、一面に発会趣旨、事業内容、役員名を記している。発会趣旨は「清韓事件に関し全国の我同志者一致協同の運動をなさんが為め」である。同志会の第一の事業は、「吾党が平素養成し来りたる思想を發表し健全なる国論を喚起せんが為」の演説会や出版で、この運動費としての募金である。ここでいう「吾党の思想」については後でもみるとおり、キリスト教に支えられたアジアの革新である。他に、医師並に看護婦を赤十字社に送ること、従軍者の慰藉奨励<sup>(30)</sup>などを挙げている。事務委員長が本多庸一、事務委員に名を連ねるのは、井深梶之助、原田助、丹羽清治郎、村井知至、植村正久、山路彌吉、それに竹越与三郎を含む11人である。

同誌(8月31日)2面には「福音新報欄(社説)」に「克己、貯蓄、献金」がある。筆者は植村正久とされる。「克己、貯蓄、献金」は、同志会で挙げた「警語」、今でいうキャッチフレーズであろう。本文は、「今や国家事あり」で始まる。「事」とはまず戦地での戦いだが、政治、宗教、教育などの変化も起こり、「帝国大進歩の動機、国民的意識の発すべき導火線たり」と続く。それ故、「日本基督教徒は国家のため、神の国のために克己して…財力を蓄積して…必要の場合に備ふる」よう心懸けねばならぬと、会の事業を説明する。先の有志会で主に考えられていた負

傷者の看護などは、本紙一面の事業内容でも順序が後に回されているが、2面の社説ではさらに、「恤兵も為して可なり。軍資献納も可なり。」いや、「別段に宗教の旗を樹つるに及ばす…自余の国民とともに、これらの義挙に与かりて可なり。否与からざる可からず」とされる。キリスト者も一国民として戦争に協力するのは当然である。しかし、これに加えて「基督教徒に非んば思ひ立つこと無く…成就すべからざる事業あるなり」と説く。同志会の特殊キリスト教的目的集団としての性格が強調されている。その目的とは、キリスト教の立場に立って「日清事件の性質、その含意する所の東洋の大問題と日本帝国の天職及び冀望」を明かにすること、そして「これに対する基督教の関係及び責任を明らかに」して、「一致合同大いに天下のために為す所あらんとす」となる<sup>(31)</sup>。

ここまでが同志会についての総論的な趣旨説明であるが、これに続く文章は、1週前の「東西の文明、日本の更正」、1週後の「第一の維新、第二の維新」の2つの評論論旨と重なる部分が多く、植村自身の日清戦争論として読むべきであろう。

「あ、東洋の興起は日本帝国の強大を致すに在り。日本帝国の地位関係斯の如く重く且つ大なるは、其の根本的革新の方針を執りて前進し、全く十九世紀の文明と同化して、東洋の天地に一生面を開かんとするを以てなり。」<sup>(32)</sup>

植村には「清国の勢力東洋に跋扈するときは、亜細亜の運命益々危殆ならんとす<sup>(33)</sup>」との思いがあり、これを防ぐのは日本と考えた。かつて日本では、「数隻の黒船」が「馬関の砲撃を試み」て「国家の改革」が早急に不可避であることを、「一時に朝野の人心」に広めた<sup>(34)</sup>。武力衝突による国内体制の転覆を伴う「西洋文明」の襲来、この「第一の維新」を、今「第二の維新」として「外国に向かって運動せん」と説く<sup>(35)</sup>。



この運動を上記の「克己、貯蓄、献金」では「十九世紀の文明」への「同化」に託して語ったと考えられる。

周知のように蘇峰<sup>(36)</sup>は「第十九世紀ノ文明」の勝利を『新日本の青年』において高らかに唱えた。すなわち「第十九世紀ノ文明ハ人類カ造化ニ勝チ、自由カ専制ニ勝チ、真理ガ習慣ニ勝チタル事実ニシテ」全地球に及び、世界を揺るがせる勢であると<sup>(37)</sup>。植村はこの「十九世紀の文明」に日本帝国を「同化」させる形で文明の拡大を考えようとした。つまり、日本が西洋文明を担って戦うというより、日本自身も地球全体の文明化という勢いに乗って、アジアでの文明化を進めるとしたのではないか。そう考えれば、「清国に対する日本は此の勢力膨張の結果」でもあり、日清戦争は「その愈盛んならんとする機縁」となる。「東洋の天地に一生面を開」くことはまさにその帰結ともいえる。しかし、これでは「克己、貯蓄、献金」の冒頭で課題とされた日本帝国の天職に対する「基督教の關係及び責任」は「勢力膨張」の背後に隠れてしまうのではないか。

たしかに日清戦争は「東洋の天地に一生面を開こう」とする活動とみなすことができたかもしれない。しかし、他方でその「勢力膨張」は植村において、日本からアジアへの一方通行とは考えられていなかった。というのも、「保守的精神、<sup>え</sup>似<sup>せ</sup>而非国粹論は其の方向を清国と同うするものにして、実に新日本に向ひて叛旗を翻すもの<sup>(38)</sup>」だからである。国内の保守主義と清国の現状とが「其の方向を同じうする」ものという植村の判断は、蘇峰のいう「第十九世紀の文明」のように自動的に世界を覆う勢いにはそぐわない。この点で植村の文明論は、蘇峰の「十九世紀の文明」の勢いからは別れることになる。

元来維新改革は、植村にとって単なる制度改革ではなく、（事の善し悪しは別として）神主僧侶、神社仏閣が旧来のままでは無益有害と、神仏を一丸とするなど宗教上の改革まで「百事を更むる」べく始まった「国

家の改革」であった。それであるのに「六、七年前より」、つまり鹿鳴館時代の反動として「国粋保存主義」などが起こった時期から、「苟且儉安<sup>こうしよゆあん</sup>の醜態を著し、世を挙げて回顧の夢に入」ってしまった<sup>(39)</sup>。この風潮が今や「回顧の夢酣にして、保守反動の空気人を窒息せしめんとする」に至っている。日清戦争はこれを打ち破り、人々を奮起させる天から与えられた<sup>(40)</sup>チャンスに他ならない。アジアであろうが日本国内であろうが、全て「第十九世紀の文明」に抗する精神のあるところを見極め、革新運動を進める責任が、改めてキリスト者に課せられる。

「此の時にあたり日本帝国の天職を明かにし、其の自信自任の精神を發揮し、此ら非国民的の徒輩を論倒して、日清紛争の根本たる進歩革新の意義を旺んにするは、銃<sup>ひつ</sup>を提<sup>ひつ</sup>さげて高麗半島に苦戦すると、もに愛国の士が大いに尽力すべき所に非ずや。」<sup>(41)</sup>

先に福沢諭吉は、国内の保守化に「反儒教主義」の思いを募らせ清に対する「文明のための戦争」を説くことになり、内村においても「儒家の老家」清への制裁やむを得ずと考えたことを指摘した。この二人の場合、儒教文明の清国対進歩革新文明の日本という国家単位の文明論／戦争論をとった。しかし、植村の場合には国内にある保守的精神に固執する「非国民的徒輩を論倒」することも「革新のための戦い」に必要とされる。

「国民の天職を明らかにし、其の士気を鼓舞して護国愛民の本分を尽し、社会改造の切要を論じ精神的革命の大目的を標掲して、盛んに基督の福音を説かざる可からず。蓋し此の福音は国民を救ふ神の大能なり」<sup>(42)</sup>

先の「克己、貯蓄、献金」では、「日本帝国の天職」(傍点筆者)を

明らかにするとされていたが、「日本の更正」を課題として考える時には、「国民の天職」（傍点筆者）と表現されている。慣用的に用いられる「護国安民」ではなく「護国愛民」も注意を引く。文明を担う「国家」、文明国を構成する「国民」両者に対して、神から与えられる使命を、キリスト教への問いとして植村は模索しているのかもしれない。いずれにせよ同じアジアの中にありながら、日本の清に対する使命が主張されるのであるから、その使命の中身を明らかにするには、それぞれの「文明、文化」についても、より厳密な検証が必要となる。

同じ頃植村は、「世界の中の日本」の文明版ともいべき小論を残している。その文章では、西洋文明と東洋文明とに二分する代わりに四大文明を挙げ、清ならぬ支那は「偉大悠久」の事業を為した点でギリシャローマと同等の価値が付与される。この支那に対して日本は「作文」（文学）、「漆器」「蒔絵」といった伝統文化によって知られているにすぎない。日本文化がまだ「部屋住の少年」のような段階であれば<sup>(43)</sup>、日本が世界文明に名を残す清に対して、「文明」の戦争を以て迫り、日清戦争を「文野」の戦争と定義するにも難があることになろう。こうして、開戦当初に表明された「義戦」観は、自己の維新体験、日本文化の実態を顧みて必ずしも盤石な論拠を持たないことに気付いたに相異なる。植村は、開戦後もこの課題について検証と思索を重ねていく事になる。

## 二. 開戦後の戦争論

### 1. 戦争と道徳

9月に入ると、『国民之友』でも平壤での戦いが近いとの報道がなされ<sup>(44)</sup>、日本が清に勝って西欧諸国の日本に対する清より低い評価を改めさせねばならぬ<sup>(45)</sup>と、盛んに戦争の重要性を説く記事が見られる。9月14日には、海軍が制海権を掌握できない場合を想定して、「朝鮮半

島の軍事的確保」のために陸軍の増派が各師団長へ訓示され、15日天皇と大本営を宮中から広島へ移動し天皇親征を明確に打ち出し、日清戦争を国の一大重要事として遂行する体制が整えられる<sup>(46)</sup>。そして16日、平壤が陥落した。

9月14日、『福音新報』に「国交際の優勝劣敗」,「ユダヤ国予言者の覚悟を記憶せよ」,「道徳もまた戦争の一要素」からなる一連の評論が掲載された。まず、「国交際の優勝劣敗」において、植村は次のように書く。

「文明の路上に……妄りに野蛮陋習の故態を固守迷執して空しく此の土壤を塞ぎ、天物を乱用……人類の…發育の機会を障ぐるものあらば、優者進んで其の開導を務め、……強力を用いて、その文明の域に進まんことを図るべきは理の当然なり」<sup>(47)</sup>

文明の進歩の名のもとに、「優者」が「強力を用いて」介入する事は是とし、旧約聖書の「モウゼのカナン」居住だけでなく、「神武の東征」内地人の蝦夷開拓なども、すべてその下に肯定される。

次の「ユダヤ国予言者の覚悟を記憶せよ」では、前節に即して、ユダヤ人のカナン居住は神が与えた「天権に拠り」「上帝の威を」借りて、流血も厭わず行われた「正当なる侵略」により達せられたとされる。しかし、長い年月のうちに「彼らの開国の此の如き条理の存するを打ち忘れ……悪徳不虔の道に陥」る。この時に「預言者更るがわる出で…時事を切論し世の宿弊を痛撃して、回瀾の志を成就せんことを務めたり<sup>(48)</sup>。」支那、朝鮮、日本も、カナンの運命に学び「文明開化の中央に進み、大いに根本的改革を務め、有ゆる保守因循の意見感情を排斥し去るの必要焦眉の急より急なるを知らん。」これを「果敢断行の勇なくんば…帝国の運命<sup>うた</sup>転た悲しむべきものあらんとす。」国家間の「優勝劣敗」の現実、亡国の予言者に託された帝国の運命、植村は日本の置かれたのっぴきな

らぬ現実をこのように描く。実際、戦場の現実は危ういものであった。

「吾が邦人朝鮮に在りて、人類の尊貴を無視し、隣国の民を軽んじて、暴戾不遜の挙動あらんには、設令兵馬の勝利盛大ならんとするも、精神上の失敗は此の上無かるべく、日本人民は朝鮮に於いて教育伝道其他諸般の開導的事業につきては無能力の有様に陥らざるを得ず。」<sup>(49)</sup>

このような状況に対し日本人に辛うじて残された道が、道徳を「戦争の一要素」として戦いを続けることだったのかもしれない。植村はいう、「清韓の海陸に往来する日本の兵士及び人民の行為精神は其の影響する所に於て時として大砲巨艦より甚だしきものあらんとす。」それ故「有志の人士機を過たず、国のため、道のために励精奮起して努力せんこと肝要なり<sup>(50)</sup>」と。京極純一は植村において戦争の大義が常に伝道論によって補完されねばならなかったと指摘する<sup>(51)</sup>が、文明の進歩が領土拡大に伴うという既述の日清戦争観による限り、戦力と道徳は不可分なのである。「戦勝」が声高に称えられる中で、戦いにおける「道徳」の有効性を取り上げた意義は、皆無ではなからう。

## 2. 国民、軍隊、国家

平壤戦の死傷者数は9月23日発行の『国民之友』において、日本側が死者162名、負傷者440-50名、清側は死者2000余名、負傷者4000名以上と報ぜられた。平壤の陥落を受けて、李鴻章は北洋陸海軍だけの戦争から、清国を挙げての戦争体制への転換を図り、持久戦へ持ち込もうと方針を転換した。対する日本はあくまで短期決着を目指し、次の目標を北京周辺と定め、平壤から鴨緑江を渡り遼東半島方面へと進んで行った。途上再起した東学農民軍とも戦った。10月に入ると、いよいよ清国との決戦へと向かう。

『国民之友』は平壤戦を顧みて、日本の力を世界に示すことができた  
と書く。ただ、これで武官の位置だけが「軽気球の如く上がる」のは要  
注意で<sup>(52)</sup>、「平壤戦士の労思ふべし。然れども顧みて国民の発奮の如何  
も思えよ<sup>(53)</sup>」「国民の軍人を敬愛するの情愈切なり。軍人は決して驕る  
勿れ<sup>(54)</sup>」と釘を刺す。

続いて10月3日には「国民の存在」が巻頭言を飾る。「国家の実体は  
国民也。国民の存在は事実也。」と始まり、国民が「自家の存在を忘れ  
て政府を尊崇するは、是れ国民を以て政治家の犠牲たり、奴隷たらしむ  
るの段階也」と続く。国家はあくまでも国民があって存在するもの、「国  
民の活力、気象は凝結」して軍隊を作る。30年前の黒船来航の時「幾  
百年間、醉生夢死せんとする国民は、世界的波濤の間より「日本国民」  
の所在を発見した、幕府の崩壊による統一国家の形成である。その後  
27年の泰平により「日本国民」の存在は忘れ去られようとしていたが、  
終に「決して内に於ても、外に於ても、自ら軽んじ、自ら屈すべきもの  
にあらざるを叫び、ここに第二の自覚時代は来たりぬ<sup>(55)</sup>。」蘇峰は明治  
20年前後に平民主義を唱え、その担い手を豪農層から排出した「田舎  
青年」たちに求めたが、彼らはすぐ没落し「近代日本を担いうる市民、  
実業と議会政治の健全な担い手を」探しあぐねるようになった<sup>(56)</sup>。そ  
こで日清戦争を、今一度国民として、「己の位置の軽からざる…己の責  
任の容易ならざるを自覚するの時期<sup>(57)</sup>」と説く。この自覚は「内におい  
て」国民国家形成の主体となるだけでなく「身は東洋の覇主たるべき天  
分を有するを発見しぬ<sup>(58)</sup>」と、アジアでの「国民的膨張」活動の主体と  
もみなされる<sup>(59)</sup>。維新に「国民国家」樹立へのスタートを見、日清戦  
争にその拡大再生産をみる見方は、植村の第一・第二維新論に通じるも  
のがある<sup>(60)</sup>。

この『国民之友』に内村の「日清戦争の目的如何」も掲載され、改  
めて日清戦争の目的を論じ、「文化を東洋に敷き平和を計る」とした。

そのために、「正義の剣を以て」、「亜細亜的圧政と醜俗とを永遠にまで維持せんと欲する<sup>(61)</sup>」北京政府と戦い、「是より満州支那…安南暹羅…終に印度の聖地をして欧人の羈絆より脱せしめん<sup>(62)</sup>」ために、利や権柄を目的としない「義戦」を戦うとした。総じて国民国家としての「義戦」が維持されている。

### 3. 再び文明論

日清開戦期に植村は、日本と清国とは儒教主義ではくくれぬと、支那の世界文明史における地位や日本の伝統文化について語ったが、今度は西洋文明をとりあげる。ツールの戦いでもし勝敗が逆転していたら、今頃オクスフォードでコーランが声高く聞こえただろうというギボンのことばを引き、植村は「是れ実に欧羅巴の亜細亜に負けたるもの、聖書のコーランに…アリアン人種のセミチック人種に負けたるものにして、」以後の歴史は全く異なったものになったろうという。こう考えると、ツールの戦いは「歴史上の危機」であった。ならば、日清の戦いも「此の如き戦争」ではないかという。キリスト教文化圏を担う日本<sup>(63)</sup>とアジア文化圏の清国との戦いである。

「基督教は実に文明の文明にして、全世界の依て動く大動機なり。此大動機、此文明の文明にして、若し朝鮮に入り支那に入らずんば、東洋文明の扶植未だ容易に期すべからざるなり。」<sup>(64)</sup>

キリスト教を「文明の文明」であり「全世界の依て動く大動機なり」と明言した植村は、これをアジアに弘められるか否かの「危機」として日清戦争を捉えた。それ故にこそ、兵士たちには「一度負くれば是れ実に「文明」の恥辱なり、一度勝てば是れ実に「文明」の榮譽なり」と過大な使命を負わされる。日本がこの文明の宣伝者であり、清国側は被宣

伝者であることが、「危機」の実態ということになる。

#### 4. 戦いから「精神」改革重視へ

日清戦争を「文明」の使者と定義することによって、戦争そのものへの尽力より、「革新の国是を固執し」「深く邦人の心田を耕し」へ重点が移動し始める<sup>(65)</sup>。特に朝鮮伝道については「依熱附炎」は禁物で、「深き謹慎と、もっとも大なる経綸とを要す」と述べた<sup>(66)</sup>。ただし、いかに慎重にことを運んでも「朝鮮支那及其他の東洋諸国が果して能く新思想を入れ新文明と並行して進歩していくことを得るか否やは実に未決の問題なり」<sup>(67)</sup>という。維新の争乱期に「独り静かに慶應義塾創立して…其の力を開明の基礎に注<sup>(68)</sup>」いだ福澤、「農を勧め、工を励す」明治の特志家前田正名を挙げ<sup>(69)</sup>、日清戦争に軍事力による国民国家独立の夢を託して疾走する福澤へ静かに訣別を告げるのもこの時期である。

### 三. 旅順戦から講和へ

10月下旬に日本から第2軍が出て遼東半島攻略戦が始まり、11月上旬には米英露が調停による介入を始めた。しかし、清国内での決戦を望み、台湾略取を目指していた日本は容易に調停に応じようとはしなかった<sup>(70)</sup>。11月21日旅順攻撃が開始され砲台などを占拠したあと、金州方面へ脱出しようとする敗残兵の掃討、さらに旅順市街の掃討戦が25日頃まで続いた。「捕虜や負傷兵の殺害のあり、敗残兵捜索のための村落焼き討ちも行われるなど、容赦のない残酷な戦闘であった。<sup>(71)</sup>」この様子は、11月末から12月にかけて英紙『タイムズ』や、米紙『ワールド』に掲載され、福沢は「旅順の殺戮無稽の流言」を『時事新報』上に発表している<sup>(72)</sup>が、『福音新報』にはこの事件に関わる記事は見られない。

先に、平壤戦後植村が戦争の文明史的意義や「人心の改革」により



重点を置くようになったと述べたが、11月半ば、植村は「何故の伝道ぞ」を著す。世には、「教育も孤児院も剣も鉄砲も何もかも皆な伝道なり、基督教は国民道徳の基礎なり」という説もある。『福音新報』も「凡そ社会問題」については熱心に研究・従事すべく努力してきた。「同宗国民の安危休戚を思ふ」こと切なる旧約の預言者を欽慕し倣う努力もしてきた<sup>(73)</sup>。しかし「伝道の直接なるまた最も重要な目的は靈性の亡びを救はんと欲するに在り」「耶蘇の伝道は個人、しかも落魄せる個人の靈魂を愛し、其の救ひを渴え求むるの伝道にてありき<sup>(74)</sup>」戦争風に吹かれるキリスト教会を憂えての発言ではあるが、彼本来の「魂の救済」路線へ戻っている。

11月末から翌年1月末までのほぼ2ヶ月、『福音新報』には、アメリカのキリスト教誌や宣教師の日清戦争観、同志会代表として広島大本營を訪問した井深や戦地訪問牧師からの書簡、さらに「従軍夫（兵器の運搬に雇われた人夫）の帰郷」「新入營者へ」といった寄書などの記事が見出される。12月半ば、植村は「支那と日本の相違なる点」を著し、日清戦争が「歴史上の危機」ともいうべき戦争となったのは何故かという問いへの、彼なりの答えを示した。日本には、「廉恥、名聞」など体面を重んずるの風、「軽躁」などという短所がある<sup>(75)</sup>。「軽躁」も裏返せば「善きものを、更に善きものを」求める「進歩的精神」の現れとみることができる。ところが、「支那人の想像力は現今に限られ、成敗に屈託し、普通感覚の重力に抑留せられ……余りに多く實際的…儒教はセキュラリズムを主張するに過ぎたり<sup>(76)</sup>」とする。「理想」への憧憬の有無が日本と支那の決定的相異点である。「理想」を欠く国に未来はない。これが「歴史上の危機」の所以である。

2月から休戦協定が結ばれる3月を経て『福音新報』が発行禁止処分を受ける5月末日までの4ヶ月の間は、戦況そのものを論ずることから離れて、文明、政治、宗教について、基本的な考察を進めていた事が分

かる。これらを紹介して本稿の結論を得たい。

第1に、1895年1月末の、神とキリスト者そして歴史の進行に関わる社説がある。「同情の道德」「成功を偶像とする勿れ」と「真理の戦勝は二様なり」である。まず「ユダヤ人にはユダヤ人の如く」を引用して、植村は「同情の道德」で次のように書き、さらに2編が続く。

「妄りに愛に拘泥し、同情に溺れ、同化に多忙<sup>いそがは</sup>しく、国民の精神と一致することをのみ急と為す如きは基督教の主義に非ざるなり…吾らは永在なる真理に依りて、国粹の是非長短を判別し、愛国の同情に駆られず又之が奴とならず、道に由りて孤立し義に由りて独歩するの気概無かるべからず」<sup>(77)</sup>  
(同情の道德)

「吾らは鋭意熱心法を行ひて命を俟つべきのみ……伝道は吾が道を以て天下に教ふること也。天下に由りて吾が道を作らるゝに非ず。」<sup>(78)</sup> (成功を偶像とする勿れ)

「基督教は人民を悦服せしめて、其の真理の勝利を示すことあり…然れども真理の勝利と其の力とは又他の側面より顕彰せらる……真理を棄て、之に反きて衰へ亡ぶるものあり……此を以て知る基督教は行はれて、其の力を示し、また行はれずして其の成功に誇らんとするものなり。個人に於ても、国民に於ても、基督教の勝利は右両様のうち何れに属すべきかと云ふ疑問あるを思ふべし。」<sup>(79)</sup> (真理の戦勝は二様なり)

「同情の道德」から始まる3編は、必ずしも理路整然と結論に導かれる文章ではない。しかしキリスト教「文明」と日本の進歩を一直線に語るかにみえた開戦以来の口調が、何れの小論でも様々に留められている点が注意を引く。すなわち「時勢に同情」「国民と同化」は「永在なる

真理」と必ずしも一致せず、「天下」の要請に「吾が道」は必ずしも呼応しない。この2本はやがて「精神の高雅、心志の独立」において、「物に束縛せられず、世の利害榮辱に屈託せずして歓喜の泉常に胸中に湧くを期するは宗教の志願なり」と、キリストの福音こそ「精神の独立の基礎」<sup>(80)</sup>との考察に収斂する。ここから「ポンテオ、ピラト」を論じ「人は二個の主君に事ふる能わず。この上もなき敬愛を以て事へざれば正義袂を払って去る<sup>(81)</sup>」という。ピラトが恣にする「生殺の権」さえ「皇天上帝」から授かるのだとのイエスの指摘は、ピラトに「世上の利害を離れて別に理想国」があることを示し、ピラトを「正義」に導くためであったという<sup>(82)</sup>。

最後の「真理の戦勝は二様なり」では、歴史の興隆はそのまま「真理の勝利」の証しではない<sup>(83)</sup>とされる。軍事的な国家膨張をキリスト教に基づく西洋文明のアジアへの移植とする論理は、ついに植村の中で暗礁に乗り上げたというべきであろう。

第2に文明論に関しては、先に紹介した「支那日本の相異なる点」があったが、4月初頭、「文明の輸入と国の蓄積力」を著した。初期の文明論では、専ら文明の「前進」だけが語られ、いわば外からの強制で「文明」が広げられる可能性も考えられていた。しかし、この評論では外から輸入した文明を「消化」して「己に致」すことが問題とされる。食物に例えて、栄養のある食物でも消化できなければ役にも立ず、飢えた人に食物を過剰に与え過ぎると死ぬこともある、という。

「唯だよく其国の歴史を知悉し、宗教学問風俗嗜好等、概言せば現今の国民を為れる、過去の蓄積力の果たして幾何あるかを知り、而して新しき文明を以て、之と相待って之を啓導し開発するに在るなり。」<sup>(84)</sup>

こうして文明の進歩は、当概地の潜在力と自発的な働き、そして彼

らと「進退生死を共にするの覚悟ある」<sup>(85)</sup> 教育者を待って初めてが可能とされる。

第3に「人間の平等」である。「吾国に政論大いに興り、西洋流の自由民権説初めて天下に唱へられしは僅かに数年前のことなりしが」と始まる。植村が民権運動から明治の変革を語るのは初めてではない。1883年に発表した「日本伝道論」において、彼は自由民権運動の「自由」を切り口に、人の「自律」と社会を論じた<sup>(86)</sup>。今回は「自由民権論」を扱いながら、「平等」へとテーマを移し、その黄金の価値を説く。「人類平等」とは、「人は皆な万物の首長として、靈妙なる資を具へ、絶対なる値打ちを有するものなりとの観念<sup>(87)</sup>」に他ならない。儒仏もさりながら、キリスト教において人は「神の形に像りて作られし」ものとして、「絶対なる価値を發揮し、此の上もなき善を顕彰して以て光榮を上帝に帰するは人類の最大目的なり。」<sup>(88)</sup>

「凡て人の人たる道を尽すべきは、凡そ世に生れたる各個人の義務なりとす。既に天に対して此の義務を負ふ。此に於てか所謂権利なるもの生ず。何となれば吾らは世に在りて此の義務を全うするの自由を享け、之に相当するの余地を与へらるべき筈なればなり。」<sup>(89)</sup>

彼は「天賦人權」と呼ぶべき「権利」を、神に対する「義務」に基づいて説明する。この義務を全うするために相応の「自由」がなければならず、「権利」はこの「自由」を保証するためのものである。

「吾が身を動かし、吾が舌を振ひ、吾が筆を走らせ、吾が道を信じ、吾が礼拝を行ふの保証なくんば、何を以て能く、此の天分の義務を全うすることを得んや。」<sup>(90)</sup>

まずは、表現の自由、信教の自由といった市民的自由権を説く。さらに、

「公共の利害を慮かり、天下のために経営し、已むなくんば人類のために身を犠牲にするの機会を与へらるゝは政治に参与することに非ずや」<sup>(91)</sup>

「参政権」を獲ないことは「道徳の高尚にして且つ広き領分を取り上げらるゝものなり」と、政治的自由権を明確に主張している。かつては、「君民同治の弊を甘受せん」<sup>(92)</sup>と消極的な表現だったが、この時期には市民的自由のみならず、参政権の必要を説き、さらに翌月には北海道開拓民の入植地に対する責任遂行のコンテクストで参政権に論及する<sup>(93)</sup>。北海道開拓民は、イスラエル人にとってのカナン、日本人にとってのアジアとの比喩で語られた<sup>(94)</sup>「文明移植」の地であった。この先に清や朝鮮での、日本人のあり方が見えていたはずである。

4月末講和条約に並行するように始められた三国干渉の時期に書かれた「平和の恢復」と、広島の本営の東京還幸の翌5月31日に書かれた「社会進歩の天候」は、日清戦争の総括となる評論である。植村は「凍雪のなかに散り失せ、海に陸に砲銃の煙とゝもに空しくなりし」犠牲が日本と清国両国にあり、特に「戦鬪の巷に居住せる其の民は流離顛沛凍餓に泣きて、其の困難名状すべからざるものありき<sup>(95)</sup>」と清の惨状を書く。もちろん清に対して「人民が其の保守的なりしために被りし嚴譴に醒まされ、大いに国風を改め、制度文物を修正し、其の国勢を恢復」して、「更革自新」する事を願うが、日本人も「分に応じて力を尽く」し、占領地において日本人は「天然を当然に用い、之を正しく管理して、更迭の宜しきに適へるを示さざるべからず」と<sup>(96)</sup>その責任をただす。「社会進歩の天候」も同様の議論を展開し、次のように結んだ。

「征清の師は文明を擁護せるに由りて義とせらるべし。この戦ひの結果は日本の大進歩とならずんば恐ろしき茶番狂言たりしなり。吾ら社会の天候が其の茶番狂言に非りしを示さんとするを見て喜ぶ」<sup>(97)</sup>

この評論を掲載した『福音新報』220号は発行直後の6月早々発行禁止処分の通告を受けた。この号には、新聞題字の下に「盗賊を旅伴とせんよりは単行するを優れりとし、安全なりとす……よし汝に害を加へずとも、尚汝の貴重する時間を盗むなり」との金言が掲げられている。ところが巻頭は、陛下の還幸を称える次のような節を含む歌<sup>(98)</sup>である。

「御軍は神軍なり 海原に的もなし  
山岡に城もなし から人はぬかづきふし  
とつ国はあきれまどひ たぐひなき皇旗の光」

ここまで煙幕を張らなくともと思うが、ともかく「社会進歩の天候」を含む220号は政権の座にあるものに、植村からの批判と抗議を読み取らせたのである。教育勅語発布後におこった内村鑑三の「不敬事件」後の「不敬罪と基督教」について二度目の発禁処分である。

「茶番狂言」と化しそうな清国の状況を見て、内村も「隣国の独立は措いて問題とせず」ただ、戦勝の利益を収めようと汲々とする様に、義戦を信じた己の不明を恥じると、5月22日ベル宛書簡に書き、その反省から日露戦争時には「非戦論」を唱えるようになる。

植村の発言の歯切れの悪さは、彼の発言が時代状況に即して書かれていることによる。特に彼は「受け手」の状態を重視した。文明を輸入させるには、「其国の歴史を知悉し、宗教学問風俗嗜好等…現今の国民を為れる過去の蓄積力」を考慮に入れねばならないとしたように、教育者、指導者が物事を一刀両断する事を良しとしなかったのである。また、

彼の第一維新の経験の影響もあった。西欧列強の圧倒的な軍事的文化的格差の下で日本が「独立」を獲得、維持して来たように、アジア諸国も「文明化」されねばならぬとした。特に植村は個々人の独立と共に国家の独立をも文明化の一面として重視した。しかし植村は本論で明らかにしたように日清戦争終結までに力で文明を扶植するという考えと訣別した。自ら培うもの以外は社会も国家も変えることはできないと考えるようになったからである。この先に、朝鮮のキリスト者の独立心を称えて政府の怒りを買った3度目の発禁処分がある。これらについても、内村の非戦論への変化と併せて、日露戦争までを改めて論じたい。

注

- (1) 加藤陽子『戦争の日本近現代史』講談社 2002
- (2) 大濱徹也『庶民の見た日清・日露戦争』刀水書房 2003
- (3) 実際には日本軍が外地で初めて軍事行動をとったのは、朝鮮王宮を攻撃して朝鮮国軍を撃破、朝鮮政府を親日派に交代させた1894年7月23日であった。
- (4) 当時の内村鑑三の思想と生活については、鈴木範久『内村鑑三日録 1892～1896』教文館 1993、同『『代表的日本人』を読む』大明堂 1988を参照されたい。
- (5) 鈴木範久『『代表的日本人』を読む』大明堂 1988参照
- (6)-(7) 「日清戦争の義」『内村鑑三全集』3 P.105
- (8) 『日本及び日本人』に描かれた西郷の征韓論について、内村は「日本がヨーロッパの列強に対抗するための領土拡大と、東アジアの指導者としての使命感」によって説明しているが、西郷の征韓論はむしろ秀吉の朝鮮出兵にもつながる、朝鮮を日本に服属させるべしとする思想であり、この二要素が、内村の西郷においてつなげられたと佐谷は述べている。(佐谷真木人『日清戦争』(講談社 2009) 第1章征韓論ふたたび、参照)

- (9)-(10) 「日清戦争の義」『内村鑑三全集』3 p.106
- (11) 柳父章は、1840年4月『チャイニーズ・リポジトリ』に掲載されたジョン・モリソンの論文を紹介して、彼等は清国政府を「傲慢、一人よがりの優越、至上主義」であり、イギリスとしては、「対等の条件で交渉」できることを望んでいると、している。(柳父章『ゴッドと上帝』筑摩書房 1986 p.75-78)
- (12) 「日清戦争の義」『内村鑑三全集』3 p.109
- (13) 陸奥宗光は国民に開戦理由を納得させるため、何としても日本の正当な要求を清が「拒否した」形をとろうとしたとされる。(加藤陽子『戦争の近現代史』第五講『なぜ清は「改革を拒絶する国」とされたか、参照])
- (14) 「東洋の大機」『国民之友』1894.7.3
- (15) 「我邦は朝鮮を以て、自主の国となし、独立国となし飽迄その独立を幫助せんと欲す」のに対して、清国は朝鮮を自個の属邦となし、併呑せんと欲しているのであるから、「一大決戦せざる可らず」と伊藤博文に決断を迫る文もある。(「春畝先生に与ふるの書」『国民之友』1894.7.13)
- (16) 植村正久も「清国の勢力朝鮮に盛んなるは」朝鮮の不幸、亜細亜、世界の不幸であるが、「吾が勢力を高麗半島に張るは人類の進歩に大利を与ふるの拳」「心霊上、倫理的に……日本の地位は公明正大」なるものとする。(「此れ実に心霊上の問題なり」『福音新報』1894.8.17)
- (17) 『世界史に徴して日支の関係を論ず』『内村鑑三全集』3 p.30-37。この時期の内村については、鈴木範久『内村鑑三日録1892～1896』教文館 1993 p.117ff 参照。
- (18) 徳富蘇峰「思いで」鈴木俊郎『回想の内村鑑三』岩波書店 1956 p.4
- (19) 福澤諭吉「日清の戦争は文野の戦争なり」『福澤諭吉全集』14 岩波書店 1961 p.491
- (20) 加藤陽子『戦争の日本近現代史』講談社 2002 p.115f
- (21) 橋川文三は、儒教主義復活が、福澤とその一派を閉めだした明治一四年の政変後の教育政策の基本とされたために、福澤の儒教主義に対する敵対意識が増幅され、一層強硬な反中国路線となったと述べている。(『順逆の思想』勁草書房 1984 p.32)
- (22) 鈴木俊郎「内村鑑三「日清戦争の義」前後」『泉』文化総合出版 1973.3



- (23)-(24) 内村鑑三「日本国の天職」1892『内村鑑三全集』1 p.294
- (25) 儒教倫理については武士道とも併せて尊重していたが、日本の文明への過剰なまでの使命感が、凝固してしまった旧文明「儒教」の国、「不信不実」な中国には軍事的制裁による他はないと、その態度を180度転換させることになった。(田中収「内村鑑三と儒教」『名古屋大学法政論集』1994.3 参照)
- (26) 内村鑑三「日清戦争の義」3 p.109
- (27) 「これ実に心霊上の問題なり」『福音新報』1894.8.17 ただし、『福音新報』は政論時論の認可を受けていないので、その政治社会史的背景については議論されていない。
- (28) 加藤陽子 前掲書 p.116f. 佐谷真木人 前掲書 p.145-152 など参照。
- (29) 「日清事件基督教徒有志会」『福音新報』1894.8.10
- (30) 清韓事件基督教同志会をバックに、キリスト教会は「戦地軍隊慰問使」として政府の許可のもとに満韓へ慰問に出かけることができるようになった。(中島耕二『近代日本の外交と宣教師』吉川弘文堂 2012 p.148 参照)
- (31)-(32) 「克己、貯蓄、献金」『福音新報』1894.8.31
- (33) 「東西の文明、日本の更正」『福音新報』1894.8.24
- (34)-(35) 「第一の維新、第二の維新」『福音新報』1894.9.7
- (36) 徳富蘇峰と植村正久との交流については『植村正久と其の時代』Vに詳しいが、植村が『国民之友』に寄稿したこともあり、逆に植村が蘇峰に「儒教論」執筆を依頼した事もあり、相互に距離をとりながら、しかし相応の敬意を持っていた。
- (37) 徳富蘇峰「新日本の青年」近代日本思想体系8『徳富蘇峰集』筑摩書房 1978 p.61
- (38) 「克己、貯蓄、献金」1894.8.31
- (39)-(40) 「東西の文明、日本の更正」1894.8.24
- (41) 「克己、貯蓄、献金」1894.8.31.
- (42) 「東西の文明、日本の更正」1894.8.24.
- (43) 「世界の日本」『福音新報』1894.8.17
- (44) 「平壤の戦いは、九月十日乃至十五日頃に行はるべし、而して其戦や必ず両軍共に大死傷を生ずべき題合戦なるべしと」『国民之友』1894.9.3

- (45) 「世界に於ける日本の位地」『国民之友』1894.9.13
- (46) 原田敬一『日清・日露戦争』岩波書店 2007 p.70
- (47) 「国交際の優勝劣敗」『福音新報』1894.9.14
- (48) 「ユダヤ国予言者の覚悟を記憶せよ」『福音新報』1894.9.14
- (49) 同上、著作集には「道徳もまた戦争の一要素」だけが取られているが、これは『福音新報』の巻頭に掲載された「国交際の優勝劣敗」「預言者」に続く3番目、「保守的反動と進歩の機縁」が4番目の論考で、筆者はこれら4つを小見出しを持つ一連の論考と考える。
- (50) 「保守的反動と進歩の機縁」『福音新報』1894.9.14
- (51) 京極純一『植村正久』新教出版 1966 p.86
- (52) 「武官と文官」『国民之友』1894.9.23.
- (53) 「宜しく相思うべし」『国民之友』1894.9.23
- (54) 「軍人の謙遜」『国民之友』1894.9.23
- (55) 「国民之存在」『国民之友』1894.10.3
- (56) 梅津順一は、『「文明日本」と「市民的主体」』（聖学院大学出版会 2001）において、「社会における思想の三潮流」を例にとり、このように分析している。同書 p.208-211
- (57)-(58) 「国民之存在」前掲誌
- (59) 梅津順一 前掲論文
- (60) 植村たちが『福音新報』上で、国民と国家について改めて論究するのは日露戦争に入ってからのもので、これについては稿を改めたい。
- (61)-(62) 内村鑑三「日清戦争の目的如何」1894.10.3『内村鑑三全集』3 p.144
- (63) 「西洋基督教文明」は、欧州からコロンブスによってアメリカへ、さらにペリーによって日本へ運ばれてきたと考えられている。（「歴史上の危機、文明の移植」『福音新報』1894.10.26.）
- (64) 「歴史上の危機文明の移植」『福音新報』1894.10.26
- (65) 「日清戦争を精神問題とせよ」『福音新報』1894.11.9 これは同志会の素願にあらずやともいう。
- (66)-(67) 「依熱附炎」とは、権力あるものに媚びたり、富貴の者に付き従うような考えを起こしてはならない（言志録第121条）の意。「歴史上の危機、文明の移植」1894.10.26

- (68) 「唯だ戦をのみ談ずるの日に非ず」『福音新報』1894.10.26.
- (69) 「豈にたゞ戦ひのみならんや」『福音新報』1894.11.2.
- (70) 原田敬一 前掲書p.84
- (71) 同上 p.75
- (72) 「旅順の殺戮無稽の流言」では、旅順での戦闘は一万五、六千の清兵との激戦であったこと、写真に写った市民とされる人々が軍靴を履いている等の理由を挙げて、これら外国の新聞報道は誤報だとする。『時事新報』1894.12.14;「我軍隊の挙動に関する外人の批評」同12.30。佐谷眞木人『日清戦争』p.75 - 80も参照されたい。
- (73)-(74) 「何故の伝道ぞ」『福音新報』1894.11.16.
- (75)-(76) 「支那と日本の相違なる点」『福音新報』1894.12.14
- (77) 「同情の道德」『福音新報』1895.1.25.
- (78) 「成功を偶像とする勿れ」『福音新報』1895.1.25
- (79) 「真理の戦勝は二様なり」『福音新報』1895.1.25
- (80) 「精神の高雅, 心志の独立」『福音新報』1895.5.24
- (81)-(82) 「ポンテオ、ピラト」『福音新報』1895.5.24
- (83) 「真理に反きて衰へ亡ぶるものあり…真理の勝利なり」「天に順ふものは栄え、天に逆ふものは亡ぶ。栄ゆるも…亡ぶるも天の力を顕彰すべきなり」(「真理の戦勝は二様なり」『福音新報』1895.1.25)
- (84)-(85) 「文明の輸入と国の蓄積力」『福音新報』1895.4.5.
- (86) 拙稿「若き植村の伝道路線」明治学院大学キリスト教研究所紀要43号2010.12.を参照されたい
- (87)-(91) 「人間の平等」『福音新報』1895.3.1.
- (92) 「日本伝道論」二『福音新報』1883.9.19
- (93) 「如何にせば真正の国民たるを得ん」『福音新報』1895.2.8では「北海道に移住するもの」が土地を得、境界を設けても、それだけでは豪農になれぬと始まり、その比喩で「自由権利」も実際に利用しなければ無益という。
- (94) 本文P.12参照
- (95)-(96) 「平和の恢復」『福音新報』1894.4.26
- (97) 「社会進歩の天候」『福音新報』1895.5.31
- (98) 「大元帥陛下の還幸を祝ひ奉りて」『福音新報』1895.5.31